

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02960

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症児者同士の仲間集団が社会性の発達とQOLに及ぼす影響

研究課題名（英文）The effectiveness of peer groups on the social development and QOL of children with autism spectrum disorder

研究代表者

日戸 由刈 (Nitto, Yukari)

相模女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40827797

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：1）質問紙調査により、情緒通級など仲間集団への所属経験の有る児を対象とした場合も、高学年群は低学年群よりもメンタルヘルスに問題がみられ、その要因として社交要因のみならず身辺自立など自律要因も影響する可能性や、年齢に伴い社交性よりも自律性の方がより身につけにくい可能性が明らかとなった。

2）特定のASD児の追跡調査において、適応行動尺度結果からも自律性の発達に特異的な困難が認められた。一方、仲間・友人関係の発達過程は多様であり、小学校高学年時より限定された場面において急速に特定の相手と仲間・友人関係を築き始める一群が、会話場面での直接観察、本人や保護者インタビューのいずれにおいても認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、ASD児者が同世代の仲間集団への所属に困難を呈する要因は、社会性に関わる特異的な認知機能との関係から論じられることが多かった。本研究の成果から、自律要因との関係や、共通の興味関心を持つ類似性の高い仲間の存在の有無による影響も見逃せない可能性が明らかとなった。ASD児者への幼少期からの早期支援においては、社会性やコミュニケーションに特化した支援が主流であるが、身辺自立など自律性に重点を置いた発達支援、および興味関心を介した仲間づくり支援や余暇活動支援の有用性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the effectiveness of peer groups on the social development and QOL of children with autism spectrum disorder (ASD). (1) Even in peer groups, such as resource room (Tsukyu Classroom), junior high school and the upper grade of elementary school students with ASD had more mental health problems than those of lower grades. In addition, those mental health problems could be related to socialization skills and daily living skills, and daily living skills would not be developed than socialization skills, as age. (2) In a follow-up study of school-aged children with ASD, difficulties in development of daily living skills were also recognized by Vineland- adaptive behavior scales. On the other hand, by our observation and interviews, there was evidence to suggest that the developmental processes of socialization skills, especially peer/friend relationships were diverse, and that some groups were developed to peer/friend relationships consisted of same members.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉スペクトラム症（ASD） 学齢期 仲間関係 メンタルヘルス 適応行動 QOL 社会性の発達 余暇活動

1. 研究開始当初の背景

一般社会で生活する知的発達に遅れがなく症状の軽い自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder : ASD) の青年や成人が呈するメンタルヘルスの問題や生活の質 (QOL) と仲間関係との関係に対する関心が高まっている。対応策のひとつとして、同じ障害のある者同士が集い、対等に語り合う活動を通じたエンパワーメントの効果が、世界各国で注目され始めており (藤野, 2021)、ASD 児者の孤立や QOL の問題の改善に対して一定の効果が期待される。しかし、本仮説について科学的な検証がなされておらず、支援方略としての有用性が広く認識されていないという研究課題がある。

また、近年の脳科学では、ASD 児者は類似性の低い定型発達児者よりも類似性の高い ASD 児者同士を相手にした場合の方が、共感に関連する脳部位が活性化しやすいことが示されている (米田, 2015)。ASD 児者は類似性の高い仲間集団への参加を契機に QOL や社会的認知や協働、共感など友人関係の基盤となる社会性の発達が促進される可能性が考えられる。本仮説も支援方略において有用性が高く、科学的な検証が必要である。

2. 研究の目的

本研究では、ASD の学齢児が仲間集団への所属による心理的影響について、科学的な検証を目的とする。心理的影響にはメンタルヘルスの問題や QOL、及び同世代との対人関係形成を含めた社会性発達という 2 つの側面があると想定し、次の 2 つの研究を行った。

1 つ目に、仲間集団への所属経験の有無と QOL との関係を横断的に検討する目的で、A 市の通級指導教室や特別支援学級を利用・在籍する児童の保護者に質問紙を実施した (研究 1)。2 つ目に、QOL 及び社会性の発達を縦断的に検討する目的で、特定の余暇サークルに所属する ASD 児の小集団を 3 年間追跡調査した (研究 2)。

本研究は A 市の教育委員会指導主事や通級指導教室 (通級) の教師、児童発達支援 (療育) の専門家を研究協力者とし、得られた知見は特別支援教育における自立活動のあり方の見直しや、地域における発達障害児者への支援体制の強化につながると考えられる。

なお、以下に報告するすべての研究は相模女子大学倫理審査委員会の承認を得た上で、対象者及び実施機関の責任者に説明と同意の手順を踏んだ上で実施した。

3. 研究の方法

(1) 発達障害同士の仲間集団への所属経験の有無とメンタルヘルス及び QOL との関係性に関する量的検討 (研究 1)

QOL を「さまざまな日常生活行動に、自分から意欲的に取り組んでいるか」、メンタルヘルスを「毎日学校に通っており、放課後も休日も (ほどほどに) 元気であるか」と具体的な行動次元で定義し、それぞれ独自の尺度を作成した。「日常生活行動尺度」は 12 項目であり、項目内容は表 2 に示す。「メンタルヘルス尺度」は、「毎日登校し、放課後や休日にも元気である : 4 点」、「毎日登校するが、放課後や休日はつかれている / ストレスや悩みが多そうに見える : 3 点」、「ほぼ毎日登校し / 月に数日の欠席・遅刻・早退 : 2 点」、「長期的に欠席 / 場面を限って参加 : 1 点」の 4 件法で評定し、4 点満点をメンタルヘルスが良好な状態と定義した。

表 1 対象児 (情緒障害通級利用児 136 名)

学年	男	女	計	学年帯
1	17	6	24*	低学年 73 名 (56:16, *不明1)
2	19	2	21	
3	20	8	28	
4	23	4	27	高学年 63 名 (47:16)
5	17	6	23	
6	7	6	13	
計	103	32	136	

この 2 尺度から構成される無記名アンケート調査への協力を、A 市の A 小学校、B 小学校の情緒障害通級 (集団形式) を利用中の保護者に依頼し 136 名から回答を得た (表 1)。

さらに、A 市教育委員会が開催した保護者対象の特別支援教育関連セミナーに参加した 286 名にも同じアンケート調査への協力を依頼し、192 名から回答を得た。対象の内訳は、特別支援学級在籍 91 名 (男 67、女 24)、通常学級に在籍 101 名 (男 70、女 31)、学年は小学 1 年から中学 3 年までであった。

(2) 仲間集団への所属経験の有る ASD 学齢児の QOL 及び社会性の発達に関する質的検討 (研究 2)

研究代表者が代表をつとめる、知的発達に遅れのない ASD 学齢児を対象としたネットワーク活動に参加し、研究協力に同意した対象者 (保護者・子ども) に以下の検査や行動観察、インタビュー調査を実施した。

① Vineland-II 適応行動尺度を用いた 3 年間の追跡調査

X 年に Vineland-II (VABS-II) を用いて調査を行った ASD の小学生 19 名 (平均年齢 9 歳 1 カ月、男 12 : 女 7) を対象として、X+3 年 (平均年齢 12 歳 1 カ月) に追跡調査を行った。併せて

適応行動に関与する要因とされる認知機能、ASD 特性及び感覚処理機能について 3 年間の推移を調べ、就学後の特別支援教育（特別支援学級/通級）の利用割合も明らかにした。

② 余暇サークルにおける「雑談」場面の行動観察と会話分析

上記ネットワーク活動の一環として実施している余暇サークルに継続的に参加した ASD の小学生 10 名を対象に、雑談的な会話で展開される ASD 児同士での会話が、定型発達者（支援者を含む）を交えた会話と質的に同じであるかを、サークル活動中の会話場面の観察及び分析を通じて検討した。対象児は 2 つのグループにわかれ、属性は次の通りであった：＜小 6 グループ＞小学 6 年生の ASD 児 5 名（男 2・女 3）。全員幼児期に ASD と診断され、就学時は通常学級に在籍し情緒障害通級を併用していた。WISC-IV の FSIQ の平均は 107.6 であった。＜小 4 グループ＞小学 4 年生の ASD 児 5 名（男 5）。全員幼児期に ASD と診断され、就学時は特別支援学級に在籍していた。FSIQ の平均は 114.3 であった（1 名は未実施）。

③ 日常場面での友人関係の特徴に関する保護者へのインタビュー調査

知的発達に遅れはないが幼児期から集団適応が困難であり、就学を特別支援学級在籍から開始した ASD の小学 6 年生の保護者と子どもを対象にインタビューを行い、小学校高学年時の仲間・友人関係にみられる特徴を明らかにした。対象の選定方法は、上記のネットワーク活動での募集案内において研究協力に応じた親子の中から、幼児期に療育センターの診療所で ASD と診断され、就学時から特別支援学級に在籍し、知的発達に遅れのない（IQ が概ね 85 以上）、小学 6 年生男子という条件に合う 6 組を選定し、子どもに対しては発達評価も行った。

4. 研究成果

(1) 発達障害同士の仲間集団への所属経験の有無とメンタルヘルス及び QOL に関する量的検討の結果から明らかになったこと、及び課題

先に調査した 136 名の回答のうち、「日常生活行動尺度」の得点に対して探索的因子分析を行った結果、12 項目には 3 つの背景因子が想定された。第一の因子は仲間、行事など家庭外での「社交」に関連（5 項目）、第二の因子は家族、趣味など「家庭での過ごし方」に関連（3 項目）、第三の因子は金銭管理、身辺自立など「自律」に関連する（3 項目）と考えられた。ゲーム・ネットはどの因子にも属さず独立性の高い項目であった。

項目ごとの得点の平均値を t 検定を用いて比較した結果、高学年の方が、親が同伴しない外出・移動、趣味・余暇サークルへの参加が有意に高く（ $t(131)=3.51, p<.001$ $p=.030$ ）、趣味・余暇サークルへの参加も有意に高い傾向がみられた（ $t(129)=2.19, p=.030$ ）。一方、家事手伝いは低学年群の方が有意に高い傾向がみられた（ $t(133)=2.54, p=.012$ ）（表 2）。3 因子の尺度得点の平均値を t 検定を用いて比較した結果、「社交」のみ低学年群よりも高学年群の方が有意に高かった（ $t(122)=2.53, p=.013$ ）（表 3）。

「メンタルヘルス尺度」については、低学年群と高学年群で得点を比較した結果、低学年群の平均は 3.60（SD0.83）、高学年群の平均は 3.24（SD1.07）。t 検定の結果、低学年群よりも高学年群の方が有意に低い傾向がみられた（ $t(133)=2.21, p=.029$ ）。4 点満点を良好群（92 名）、3 点以下を非良好群（44 名）とし、3 因子の尺度得点の平均値を t 検定を用いて比較した結果、良好群の方が「社交」が有意に高く（ $t(121)=4.96, p<.001$ ）、「自律」も有意に高い傾向がみられた（ $t(128)=2.56, p=.012$ ）。（表 4）

表 2 対象児 136 名の日常生活行動

保護者が感じる、お子さんの意欲や取り組みについて 1 点(低)から 4 点(高)で評定してください。						
因子	項目内容	低学年		高学年		t検定 P 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
社交	クラス外での自由な仲間関係	2.92	1.296	3.17	1.107	0.240
	学校のクラスメートとの関係	3.22	1.057	3.23	1.031	0.938
	学校の行事・クラブ活動	3.10	1.097	3.40	1.032	0.103
	趣味・余暇サークルへの参加	2.83	1.183	3.27	1.071	0.030
	親が同伴しない外出・移動	2.72	1.197	3.40	1.032	<.001
家庭	家族との会話	3.63	0.677	3.63	0.730	0.993
	自分の趣味(ゲーム・ネット以外)	3.77	0.657	3.74	0.700	0.830
	家事手伝い	2.85	0.861	2.44	1.034	0.012
—	自宅でのゲーム・ネット	3.81	0.625	3.83	0.587	0.840
自律	買い物・お金の管理	2.93	1.068	3.08	1.021	0.404
	身辺自立	2.79	0.865	2.83	0.925	0.841
	勉強・宿題	2.67	0.883	2.49	0.914	0.248

表 3 3 因子における低学年／高学年の平均得点の比較

	N	平均値	中央値	標準偏差	t検定 p値
社交	低学年	68	2.92	2.80	0.013
	高学年	56	3.27	3.40	
家庭	低学年	73	3.42	3.67	0.108
	高学年	62	3.27	3.33	
自律	低学年	70	2.78	2.67	0.847
	高学年	61	2.80	3.00	

表 4 メンタルヘルス良好／非良好群の平均得点の比較

メンタルヘルス得点 4 点満点を良好群、3 点以下を非良好群とした場合					
	N	平均値	中央値	標準偏差	t検定 p値
社交	良好群	83	3.30	3.40	<.001
	非良好群	40	2.61	2.60	
家庭	良好群	92	3.34	3.33	0.930
	非良好群	42	3.35	3.33	
自律	良好群	89	2.90	3.00	0.012
	非良好群	41	2.59	2.67	

以上より、発達障害の小学生のメンタルヘルスに影響を及ぼす要因として、従来から指摘されている仲間関係等の社交要因のみならず、身近自立など自律要因も見逃ごせないことが、今回の対象児への調査から明らかになった。また今回、低学年群よりも高学年群の方が社交得点が高い反面、自律得点に関しては群間差がなかったことから、自律性の方がより身につけにくいという可能性も考えられた。

なお、後に調査した 192 名の回答のうち、メンタルヘルス尺度が 4 点満点であった割合は、特別支援学級在籍群は相対的に高かったが、通常学級在籍群は低く、また年齢帯が高い群ほど低い傾向が示された。今後の課題として、全データ 328 名を通常学級のみ在籍する群、通常学級に在籍し通級指導教室を併用する群、特別支援学級に在籍する群にわけ、発達障害の仲間集団への所属経験の有無や頻度とメンタルヘルス及び QOL との関係性について検討を行う。

(2) 仲間集団への所属経験の有る ASD 学齢児の QOL 及び社会性の発達に関する質的検討の結果から明らかになったこと、及び課題

① Vineland-II 適応行動尺度を用いた 3 年間の追跡調査

知的発達に遅れのない ASD 児 19 名を対象に、VABS-II を用いて 3 年間の適応行動の推移を分析した結果、「適応行動総合点」、「コミュニケーション」の標準得点有意に低下した。また「地域生活」、「読み書き」の評価点は有意に低下し、「身近自立」、「受容言語」の評価点は有意に上昇した。(表 5)。

併せて、対象の個人要因である ASD 特性と感覚処理機能の経時的变化を調べるため、X 年時と X+3 年時それぞれで SRS-2 対人応答性尺度、感覚プロファイルを測定したところ、3 年間で大きな変化はみられなかった。一方、対象の環境要因の特徴の 1 つである特別支援教育の利用年数を調べたところ、特別支援学級や通級指導教室を利用する割合が X 年時 (9 歳 1 カ月時) で 84.2%、X+3 年時 (12 歳 1 カ月時) で 57.9% であった。今後の課題として、3 年間の個人要因に変化がないことから、特別支援教育、特に利用率の高い特別支援学級という環境要因の影響について検討を行う。

表 5 VABS-II に関する X 年時と X+3 年時での得点比較

	X 年 (9 歳 1 カ月)	X+3 年 (12 歳 1 カ月)	t 値
適応行動総合点	57.7	53.8	3.17**
日常生活スキル	58.2	59.6	0.63
身近自立	5.4	9.6	4.42**
家事	8.2	7.5	1.27
地域生活	11.9	10.1	3.79**
コミュニケーション	63.5	55.4	2.77*
受容言語	7.5	9.7	4.37**
表出言語	8	8	0.09
読み書き	12.4	10.3	3.76**
社会性	59.4	60.7	0.72
対人関係	8.9	9	0.16
遊びと余暇	8.7	9	0.49
コーピングスキル	9.4	9.7	0.79

* p < .05 ** p < .01

② 余暇サークルにおける「雑談」場面の行動観察と会話分析

小 4 グループの ASD 児 5 名と小 6 グループの ASD 児 5 名を対象に、余暇サークル参加時の「雑談」場面の行動観察をもとに Adams & Bishop(1989)を参考に冒頭 10 分間の会話分析を行った結果、いずれのグループも会話構造自体には定型発達者の有無による違いはみられなかった。しかし冒頭 10 分間の非社会的行動の出現数、会話場面全体での支援者の有無の影響、会話場面全体でのトピックについては違いがみられた。

冒頭 10 分間の非社会的行動の出現数は、30 秒ごとの Zoom の静止画面において、各児の「画面内に存在しない(N)」「画面にいるが顔や目が映っていない(E)」「明らかな自己刺激行動(S)」の有無をチェックした結果、小 4 グループの生起率は<在室条件>N 7%、E 20%、S 3%、<退室条件>N 9%、E 10%、S 2%であったが小 6 グループでは<退室条件>のみ E 3%であった。

会話場面全体での支援者の有無の影響においては、小 4 グループでは<在室条件>トピック数 3、会話への従事時間 850 秒、<退室条件>トピック数 4、従事時間 325 秒、内容は両条件とも「各児の個人的経験・興味に基づく話題(落とし穴、米国大統領選、食品と健康など)」であった。小 6 グループでは<在室条件>トピック数 3、従事時間 1470 秒(開始 10 分以降持続したトピックは除く)、<退室条件>トピック数 1、従事時間 1995 秒、内容は両条件とも「学校での出来事」であった(図 1)。

小 6 グループでは参加者同士が互いに相手と共有しやすい話題を選択

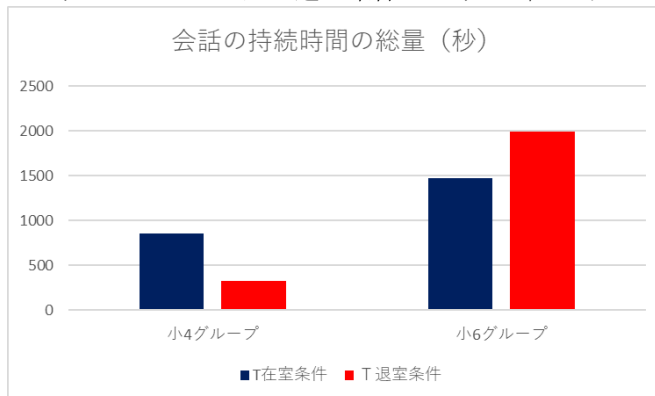


図 1 支援者の有無ごとの会話の持続時間

し、会話構造のみならず、発話のつながりなどの点でも異常性は認められなかった。小4グループでは各自の狭い興味関心に基づく話題が選択され、互いの発話への関心が乏しく、相互交渉の成立は散発的であった。今後の課題として、今後も両グループの追跡を行い、各グループの対象児にみられる発達的变化の検討を行う。

③ 日常場面での友人関係の特徴に関する保護者へのインタビュー調査

保護者へのインタビューの結果から、対象6名は次の3つのタイプに分類された。1つ目は小学校低学年時より特定の相手と日常的に交流し、何でも話せる仲間・友人関係を築けている2名（タイプ1）。2つ目は小学校高学年時より限定された場面において急速に特定の相手と仲間・友人関係を築き始めたが、「友人関係よりも自分の興味や都合を優先させる」特徴の強い2名（タイプ2）。3つ目は活動や場面を共にする相手と交流はできるが特定の相手との関係形成が観察されない2名（タイプ3）であった。対象6名の仲間・友人関係の発達過程は多様であり、タイプ1、タイプ2など先行研究であり報告されていない過程を示す事例もみられた（表6）。

表6 対象6名（小6・男）の友人関係に関する保護者インタビューの結果

	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6
FSIQ	83	153	121	100	94	105
適応行動総合得点	45	84	51	43	48	51
AQ得点(母記入)	24	25	35	33	26	18
通常学級への移籍	小5～	小4～	無	小6～	無	小6～
(1)現在の仲間・友人関係	共に計画を立てて外出ができる、特定の友人が複数いる	誘い合って一緒に遊ぶ特定の友人が複数いる	ゲームに限って、誘い合って遊べる特定の友人複数。中学生の友人あり	公園で知り合い、誘われると遊ぶ特定の友人複数、中学生の友人あり	幼稚園からの知り合いで現在も同じクラスの仲間とその場だけ交流する	特定の仲間・友人は持たず、公園で知り合った不特定の相手と交流する
(2)過去の仲間・友人関係	現在と変わらず（計画を立てて外出するまではなかった）	現在と変わらず（一方的で、相手の気持ちを考えることはなかった）	特定の友人はおらず求めることもなかった	特定の友人はおらず友達は「弟」と答えていた	現在と変わらず	就学時から同じクラスの2学年上の男子とその場のみで交流していた
(3)保護者から見た特徴	親に話しにくいことを話せる相手	親に話しにくいことを話せる相手	趣味仲間。誘われても興味がなければ行かない	誘われると居心地よい。自分のやりたいことが優先	いないとつまらないが自分の都合が優先	その場で楽しく過ごせるだけの関係
	タイプ1		タイプ2		タイプ3	

本結果の妥当性を検証する目的で、タイプ2の2事例（事例3、事例4）の保護者（両事例とも、母親）へのインタビューの回答と本人に実施した同じ項目でのインタビューの回答について、研究分担者や研究協力者も含めた3名の研究者で一致/不一致の判定を行った。結果、母親と本人の認識の一致率は事例3が57%（4/7）、事例4が71%であった（表7）。具体的なデータに基づき違いが生じた要因について検討を行ったところ、2事例では共通して、母親は本人の人間関係の悩みや将来の夢について概ね把握しており、一致度が高かった。一方、友人関係や相談相手に関する質問においては、本人と母親の回答や認識に違いがみられた。事例3では、本人の友人関係はこの1年間で急速に発達しており、親密で相互的な関係性の芽生えがみられた。一方、母親はASDのわが子がそのような発達を示すことを想定していないようであった。事例4では、本人の友人関係の捉え方が独特であり、母親は本人の独特な捉え方を理解できていないようであった。

表7 母親と本人の回答の一致/不一致

以上より、小学校半ばまで友人関係がなかったASD児の中には、心の理論を獲得し始める小学校高学年以降、多様な友人関係を急速に発達させる事例が存在する可能性が示唆された。また、その多様性は本人からの聞き取りだけ、あるいは本人にとって身近な大人からの聞き取りだけでは十分な説明が難しく、両者に対して丁寧な聞き取りを行い、両者の認識が異なった点に着目して詳細に検討を行うこと、およびASD同士での雑談場面の観察や会話分析を行うことで新たな発見につながる可能性が考えられる。以上の知見は、現在論文を作成中である。

インタビュー項目	事例3	事例4
(1)友人とは、どのような人か？	不一致	一致
(2)友達はいるか？	一致	不一致
(3)友達と何をするか？	不一致	一致
(4)親友はいるか？	一致	一致
(5)相談できる相手はいるか？	不一致	不一致
(6)人間関係の悩みどのようなものか？	一致	一致
(7)将来の夢をどのように考えているか？	一致	一致
母親と子どもの認識の一致率	57%	71%

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 日戸由刈	4. 巻 15
2. 論文標題 小学校高学年のASD男子の語りにもられる友人関係の特徴：2組の本人と母親へのインタビューを通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 子ども教育研究	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 日戸由刈	4. 巻 13
2. 論文標題 特別支援学級に在籍する学齢児のメンタルヘルス、日常生活スキル、人間関係に関する実態調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子ども教育研究	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 日戸由刈	4. 巻 10月号
2. 論文標題 ライフステージを見通してよりよく生きていくために必要な支援とは何か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 LD, ADHD & ASD	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武部正明・藤野 博・日戸由刈	4. 巻 41
2. 論文標題 知的発達に遅れのない学齢期の自閉スペクトラム症児の適応行動 の実態と関与する要因の検討：日常生活スキルの問題を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Komeda H, Kosaka H, Fujioka T, Jung M, Okazawa H	4. 巻 10
2. 論文標題 Do individuals with autism spectrum disorders help other people with autism spectrum disorders? An investigation of empathy and helping behaviors in adults with ASD.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2019.00376	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米田 英嗣, 間野 陽子, 板倉 昭二	4. 巻 62(1)
2. 論文標題 こころの多様な現象としての共感性 (特集: こころの多様な現象 「精神疾患」の基礎的研究の現在)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武部正明, 藤野博, 日戸由刈	4. 巻 45(4)
2. 論文標題 情緒障害通級指導教室に通う発達障害のある小学生・中学生への指導の優先順位と教師による適応行動の評価との比較: 言語障害通級指導教室に通う小学生との比較	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 359-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 日戸由刈・武部正明・藤野 博・大井 学
2. 発表標題 知的発達に遅れのない小学校高学年のASD児の仲間・友人関係: 就学を特別支援学級在籍から開始した場合: 保護者インタビューの結果から
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会 (ポスター発表)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日戸由刈、武部正明、米田英嗣、大井学、綿貫愛子
2. 発表標題 学齡期から青年期への『移行期』におけるASD者の心理的課題
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（ラウンドテーブル企画趣旨の説明）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 日戸由刈
2. 発表標題 ASD小学生同士の雑談における発達的变化
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（ラウンドテーブル話題提供）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武部正明
2. 発表標題 早期支援を受けている ASD 小学生の適応行動の特徴
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（ラウンドテーブル話題提供）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 米田英嗣
2. 発表標題 ASD小学生における人物判断
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（ラウンドテーブル話題提供）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武部正明、日戸由刈、藤野 博、米田 英嗣
2. 発表標題 知的発達に遅れない学齢期の自閉スペクトラム症児における適応行動 - その4
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（ポスター発表）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 日戸由刈・藤野 博・武部正明・米田英嗣・大井 学
2. 発表標題 学齢期のASD児同士で雑談は楽しめるのか？（2） - 発達の变化の検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武部正明・日戸由刈・藤野 博
2. 発表標題 知的発達に遅れない学齢期の自閉スペクトラム症児における適応行動 - その 3：身辺自立や家事等の日常生活スキルの実態と影響する要因の検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 日戸由刈
2. 発表標題 自閉スペクトラム学齢児の小集団支援による長期的効果
3. 学会等名 日本心理学会公開シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日戸由刈・藤野 博・武部正明・米田英嗣
2. 発表標題 学齡期の ASD 児同士で雑談は楽しめるのか? - 「ある・ある! タイム」の会話分析を通じて -
3. 学会等名 日本発達心理学会第 3 1 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武部正明・日戸由刈・藤野 博
2. 発表標題 知的発達に遅れない学齡期の自閉スペクトラム症児における適応行動 - その2: 幼児期から診断および支援を受けている小学生群の実態 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第 3 1 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日戸由刈
2. 発表標題 療育センターでの仲間づくり支援プログラム開発から大学での生涯学習プログラム開発に至るまで
3. 学会等名 第64回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日戸由刈・武部正明・藤野 博
2. 発表標題 情緒障害通級指導教室を利用する小学生136名の日常生活行動とメンタルヘルスの関連性の検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 武部正明・日戸由刈・藤野 博
2. 発表標題 知的発達に遅れのない学齢期の自閉スペクトラム症児における適応行動 - その6：小学生の適応行動に関する3年後の追跡調査：属性の経過を踏まえた検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 日戸由刈	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 220
3. 書名 余暇活動支援（本田秀夫、大島郁葉（編著）おとなの自閉スペクトラム：メンタルヘルスケアガイド）	

1. 著者名 日戸由刈, 萬木はるか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 188
3. 書名 発達が気になる子の子育て10か条	

1. 著者名 日戸由刈・安居院みどり・萬木はるか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 122
3. 書名 学校で困っている子どもへの支援と指導	

1. 著者名 米田英嗣・間野陽子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 児童心理学の進歩2021 第2章物語理解と感情	

1. 著者名 日戸由刈	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 10
3. 書名 学齢期の計画的グループから青年期以降の主体的な余暇グループへ；東條吉邦・藤野博（監）・高森明（編著）「発達障害者の当事者活動・自助グループの『いま』と『これから』」	

1. 著者名 日戸由刈	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 6
3. 書名 特別な支援ニーズのある子ども（1）発達障害・他；尾崎康子・阿部美穂子・水内豊和（編著）「よくわかるインクルーシブ保育」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤野 博 (Fujino Hiroshi) (00248270)	東京学芸大学・教育学研究科・教授 (12604)	
研究分担者	米田 英嗣 (Komeda Hidetsugu) (50711595)	青山学院大学・教育人間科学部・教授 (32601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	武部 正明 (Takebe Masaaki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関